



きん・たつひろ
1969年、東京都生まれ。94年、群馬大学医学部卒業。東京女子医科大学東医療センター、国立がん研究センター研究所、国立がん研究センター東病院など

を経て、2012年に東大宮総合病院（現・彩の国東大宮メディカルセンター）外科部長兼手術部長。肝胆脾外科高度技能専門医。医学博士。趣味はタイピング。

肝がんに対する肝切除術に、腹腔鏡が導入されていることは小欄でもたびたび紹介してきた。低侵襲（手術創が小さい）という

「姿勢」が何より重要になって

決められた手順を踏んで丁寧に

メリットの半面、一部で医療事故が問題になるなど、その安全性に懐疑的な見方があることも

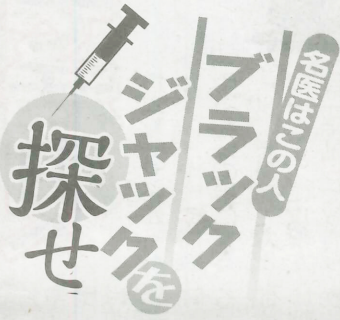
技術と安全配慮を高水準で両立 根治性にこだわる肝臓外科手術

進めていくことに尽きます。手術というものは、外科医にとって

「技術」と「安全への配慮」を高いレベルで兼ね備えた消化器外科医だ。日本肝胆脾外科学会の「高度技能専門医」第一期認定医12人の一人。その技術の高さは誰もが認めるところでありながら、手術に対する謙虚さを忘れることはない。

「腹腔鏡手術の適用例であり、利益と危険性を説明し、

不安が残るようなら開腹手術を勧めます。患者さんが後悔しない、納得できる治療をしたいので」



彩の国東大宮メディカルセンター外科部長と手術部長を兼務する金達浩医師は、まさにその

は毎日のことでも、患者にとっでは人生で一度あるかないかの経験。それを任せてもらう以上、どんな状況でも全力を尽くす義務がありますから」
相手の目を見て、丁寧に言葉を選んで話すその物腰から、誠実な人柄が伝わってくる。そしてそれは、命を預ける臨床の場において、何よりも「安心感」が重要であることを、再認識させてくれるのだ。